



ポール・チャーチランドの脳神経倫理的アプローチについて

著者	小谷 俊博
雑誌名	倫理学
巻	35
ページ	103-117
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00157175

ポール・チャーチランドの脳神経倫理学的アプローチについて

小 谷 俊 博

一 はじめに

人間の脳について解明が進むにつれ、私たちの心的現象を引き起こす脳内のメカニズムが明らかになってきている。心的現象の一部と考えられる道徳判断などの道徳に関する人間の知的活動も、脳神経科学による知見が蓄積されてきた。脳神経科学の知見から道徳的諸現象を説明しようとする研究分野は脳神経倫理学と呼ばれ、現在盛んに研究が行われている。

本稿は、この脳神経倫理学的研究の先駆的な議論の一つとして、ポール・チャーチランドが一九九〇年代を中心に展開した議論を検討したい。彼が提起した脳神経倫理学的構想、および彼の議論に向けられた批判を合わせて検討することで、脳神経倫理学の探究課題を浮き彫りにすることが本稿の目的である。

二 ポール・チャーチランドによる社会スキルとしての道徳

ポール・チャーチランドは認知科学基盤の道徳的諸現象の解明に向けて議論を展開してきた。彼の道徳研究の基本方針は、以下の引用から明らかである。

できれば、この研究が長く実り多い知的伝統の始まりであってほしい。その知的伝統とは、一方には認知的神経生物学(cognitive neurobiology)、もう一方には道徳理論があり、この両者が体系的に作用し合い、情報を補完し合うことによって支えられた伝統である。(Churchland P.M. 1998a: 83)

すなわち彼の考えでは、より低次での認知神経科学の知見と、道徳理論の研究によって特徴づけられる高次の概念が相互作用することで、道徳という現象がより適切な形で解明される。この考えのもとで検討されたのが、道徳的認知現象を認知神経生物学

の概念によって統合的に説明する試みである。まず、彼の研究の根本的な特徴を見ていくこととする。

二・一 スキルとしての道徳的認知

ポール・チャーチランドは、道徳的な概念の区別を行う私たちの能力は、顔の認識などと同様に、複雑に構成されたシナプス結合という母体にある、と考える。私たちはさまざまな事例に出会い、どういった場合にどのような道徳的概念が適用されるかを学習する。新たな事例に出会った場合にも、すでに学習によって習得されたシナプス結合が構成するプロトタイプカテゴリーの内部でその事例を適切に配置することにより、適切な道徳的概念を出力することができる。たとえば、多数の少年が一人の少年に罵声を浴びせ続ける事例に出会ったとき、その事例の光景が入力されると、そこから「道徳的に重要である／重要でない」という二項対立のカテゴリーのうち、「道徳的に重要である」というカテゴリーの典型事例に位置づけられ、さらに「道徳的に悪い／道徳的に称賛すべき」という対立軸では、「道徳的に悪い」というカテゴリーの典型事例に位置づけられ、さらに具体的なカテゴリーとして「嘘をつく」「だます」「裏切る」「いじめる」「殺す」といったカテゴリーの中から、「いじめる」というカテゴリーの典型事例に位置づけられることにより、これは道徳的に非難されるべ

きいじめである、という認知が出力される。

チャーチランドは、こうした認知を可能にする、膨大なシナプス結合の構成をスキルと呼び、道徳的知識をスキルの集合として表現する。彼は、「他のあらゆる種類の知識と同様に、私がまず道徳的知識を特徴づけるとすると、それはスキルの集合として表現する」(Churchland P.M. 1998a: 84)と述べている。

このスキルとしての道徳的知識という考えが、他の道徳的現象の基礎になる。道徳的学習とは、このスキルの習得過程を指す。道徳的知覚は、道徳的知識を構成するものである。ある状況を知覚したとき、学習済みの道徳的プロトタイプの神経の活性化パターンのうち、その知覚情報の入力内容が近似するものがあれば、そのパターンを活性化させる。道徳的な多義性は、この学習済みの道徳的プロトタイプの内容が異なることを意味している。ある状況を社会性という観点から解釈するとき、人によって持っている関心や情報が異なる。それゆえ、脳内での知覚的解釈やプロトタイプの活性化が異なるのは自然なことである。この解釈の相違は、道徳的な問題に対する個人間の衝突にもつながる。

以上のように、脳の情報処理のメカニズムから道徳的な諸現象を説明するのが、チャーチランドの基本的な方法である。こうした説明の中でも、本稿の議論に大きく関わるのが人間の道徳的本性に直接関わる「道徳的徳」と「道徳的性格」についての説明である。以下では、チャーチランドがこの二つの項目をどのように

説明しているかを検討する。

二・二 道徳的徳とは何か

彼が道徳的徳について定義している箇所を参照すると、「社会的知覚、社会的反省・想像力・推論、また、社会的学習が生み出す社会的なナビゲーションと操作といった多様なスキルのことである」(Churchland P.M. 1998a: 88) という定義が与えられている。つまり、社会生活を営む上で必要とされる多様なスキルとして道徳的徳を理解している、と言えるだろう。彼は、社会的な実践が要請されるような状況を総称して「社会空間 (social space)」と呼ぶが、まさにこの社会空間の中をうまくナビゲートできる人こそが、徳のある人物ということになる。

もちろん、はじめから社会空間の中をうまく渡っていきけるわけではない。私たちはまず、子どもの段階で社会空間を構成する諸要素を正しく認識できるようにしなければならない。社会空間を構成する諸要素とは、社会性が求められる状況はどこか、社会的なやりとりはどのように行われるか、社会的に禁止されていることは何か、社会的な実践とはどのようなものか、といった問いの答えに相当する。これらの要素を背景に構成されている空間が社会空間ということになる。この社会空間を構成する要素は、私たちが直面する個々の状況の中にも見て取れる。私たちが社会空

間の中をナビゲートするということは、直面している状況の中で、自分や他者がどのような位置に置かれているか、どういったやりとりがふさわしく、また問題になるか、他者の関心は何かを理解した上で、集団の振る舞いの向かうべき方向が不適切な場合には適切な方向にシフトさせるよう交渉する、といったスキルを発揮することを意味する (Churchland P.M. 1998a: 88)。

彼は続けて、スキルであるがゆえに、習得には時間がかかることと、さらに獲得されるスキルは、個人によっても異なり、環境が異なれば同一個人内でも相違があると主張する。これらの記述の中には、具体的な徳が挙げられることもなく、社会的行為の中でどういったものが道徳的行為と呼ばれるのか、といった考察はなされない。この点については、以下で見る道徳的性格についても同様である。

二・三 道徳的性格とは何か

チャーチランドは、道徳的性格については以下のように述べている。「ある人に固有の道徳的性格とは、社会的領域 (social domain) における知覚的、反省的、行動的スキルの個人的なプロフィールにすぎない」(Churchland P.M. 1998a: 89)。すでに、社会空間の中をナビゲートするために必要なスキルのことを、彼が道徳的徳と呼んでいることは確認した。よって、ある人の道徳的性

格とは、個人がどのようなスキルとしての道徳的徳を有しているか、またどの徳を欠いているかを示すものと言えるだろう。

ここで注目すべきなのは、道徳的品格を、行動を導く規則群への遵守と同一視したり、全体の幸福度を最大化することへの欲求と同一視したりすることに対して、チャーチランドが批判的である点だ。彼によれば、人がこうした規則の遵守や幸福最大化への欲求を持つことができることは認められるが、道徳的であるためにはるかに重要で必要とされることは、「きめ細かく洗練された知覚的、反省的、社会行動的なスキルの入り組んだ集合」(Churchland P.M. 1998a: 89)である。この説明が示唆的なのは、規則遵守や幸福度の最大化といった説明は、いわゆる規範倫理学における義務論や功利主義に対応していることだ。彼はこうした規範倫理的な試みを一貫して否定している。

以上のように、道徳の本質的な特徴は、あくまで膨大なシナプス結合により実現される知覚的・反省的・社会的スキルにある。しかし、道徳をこうした個人内のスキルにのみ限定することは適切ではないと考えられる。道徳は根本的に社会的なものであり、個人の心的過程を超えて、時代を経て洗練されてきた側面がある。この点に関するチャーチランドの見解は、科学と道徳のアナロジーという観点から見て取ることができる。

二・四 科学と道徳のアナロジー

ポール・チャーチランドの道徳観について、スキルという観点からの捉え直し、というポイントのほかに、一点の深く連関するポイントがある。それは、道徳の進歩に対する強い肯定的態度と、道徳と科学を根本的に類比的に捉える見解だ。科学が進歩してきたことは理解しやすいため、科学とのアナロジーが成功すれば、道徳についても同様の進歩を認めることができる。その意味で、両者は深く連関している。

彼は、道徳的進歩と科学的進歩は、神経計算論的(neurocomputational)観点からみると、社会世界に焦点を当てているか、自然世界に焦点を当てているかといった違いがあるのみである、とする。道徳については、すでに知覚的・反省的・行動的なスキルという観点から、その諸現象を説明するという彼の試みを見てきた。それと同様に、自然科学においても、ある理論のもとに、知覚形成と行動指針を与える科学的プロトタイプが存在し、私たちはそのプロトタイプを、実験などを通して獲得する。自然科学において、科学的プロトタイプが学習され、それによって科学的な知覚、反省、行動がスキルとして習得される過程は、道徳についてすでに検討してきた見解と、構造的には同一である(Churchland P.M. 1998a: 92)。

こうした科学とのアナロジーは、スキルという観点からの構造的な類比関係の指摘にとどまらない。自然科学は、原理的な理解

の進展に伴い、他分野を統合した、より原理的で統一化された理論の構築へと進む。この点についても、このアナロジーは成立すると彼は考えている。もちろん、道徳において理論の役割を果たすのは、主として哲学者によつて提起された道徳理論に他ならない。彼は、私たちの組織化された義務と禁止の体系について、これが哲学者によつてさまざまな形で特徴づけられてきたことを例証する。たとえば、ホッブズによれば社会契約の要素として、

カントによれば定言命法の具体例として、ロールズによれば無知のヴェールに覆われた状態で合理的に選択された諸規則の反映として、それぞれ説明される。チャーチランドの見解では、こうした哲学者たちの試みは、バラバラなままの私たちの道徳的直観や、既存の道徳的理解を統合し、体系化しようとする競合した試みである。この試みは、新奇な道徳的問題に遭遇した際に、その対応能力を改善する意味で、自然科学の場合と同様の美德を持つ (Churchland P.M. 1998a: 93)。

二・五 検討すべき課題

チャーチランドの基本的な構想をこれまで概略してきた。彼の議論から示唆されることは多い。たとえば、膨大なシナプス結合は、人間だけでなく、他の生物も有している。そして、人間と他の動物では、構造的に類似する点も多いだろう。もしも人間だけ

が道徳的であるなら、脳機能の中で人間だけが有していて、他の生物は有していない機能が存在することになる。仮に人間が他の生物と基本的な機能を共有していて、その機能の程度が発展しているというだけに過ぎないなら、それに応じて、道徳性の程度差があるに過ぎないという結論を導くことになるだろう。

また、自然科学とのアナロジーを展開することで、道徳の進歩を肯定する点からは、道徳の進歩を担う制度の重要性が強調される。では、これまで論じてきたスキルとしての道徳的認知と制度とはどのような関係にあると言えるのだろうか。また、上述の点とも関連するが、他の動物に比べて、人間が道徳に関連する諸制度を発展させることができた理由はどこにあるのか。

さらに、道徳の本質を何らかの規則や欲求と同一視しようとする立場を否定するチャーチランドの見解は認められても、規則や欲求が道徳的な判断や行為に影響を与えていることは否定できない。道徳的な教育の場面でも「困っている人を助けなさい」や「いじめをしてはいけない」などのように、ある種の明示的な規則を教えられる。また、飢えに苦しむ人に進んで食べ物を差し出した、という欲求を持つ人が道徳的であることも疑えない。こうした規則や欲求は、チャーチランドの枠組みの中ではどのような位置づけられるのか。

これらの問題に関するチャーチランド自身の見解は、批判者との応答の中である程度明確に打ち出されている。そこで次節以降

では、上記のそれぞれの問題点について、アンディ・クラーク、アラスデア・マッキンタイアとの討論を中心にチャーチランドの主張を明確化する。

三 道德・言語・進歩

これまで述べてきたポール・チャーチランドの見解を主たるターゲットにして、アンディ・クラークがその道德理解を批判的に評しており (Clark 2000a) この論文を起点として、両者による議論が展開されている。アンディ・クラークの批判点は、他の動物と比較したときに、ヒトがいかに特別な存在であるかという点をチャーチランドが軽視していることに向けられる。そこで、クラークは、「外的足場 (external scaffolding)」という概念を用いて、とりわけ言語の役割の大きさを指摘することで、チャーチランドの議論が道德へのアプローチとしては不十分なものであることを指摘している。以下では、二人の相違点を具体的に見ていくこととする。

三・一 外的足場としての言語

クラーク (Clark A. 2000a) によるチャーチランドの道德観に関する批判のポイントを整理しよう。まず指摘されるのは、チャ

ーランドが膨大なシナプス結合により可能となる認知の技能知 (know-how) を強調しすぎるあまり、道德における規則の重要性を軽視しているように見える点である。クラークは、アリストテレスとカントを引き合いに出し、両者の間には、規則の位置づけなどには相違があるものの「各著者とも、正しい行動を制御する規則の認識と、ある種の技能知、あるいは実践知 (practical wisdom) の間の相互作用を含むものとして道德的認知を描出してゐた」 (Clark A. 2000: 267) と、この共通点を指摘する。このポイントこそが、クラークの考える道德的認知の基本的な特徴である。つまり、技能知と規則は相互に補完的な役割を果たし、このどちらかが欠けても、道德的認知としては成立しない。そして、チャーチランドは、このバランスを大きく欠いた描像を提示している点をクラークは批判する。

もちろん、クラークも認知科学の成果のもとに認知のメカニズムを説明する企ての賛同者であり、技能知を膨大なシナプス結合による構成と捉えた点を批判しているのではない。あくまで彼が批判するのは、技能知と同様に、規則の役割や規則を表現する言語の重要性も認識すべきであり、その認識がチャーチランドには欠けている点である。

実際に私たちは、言語を用いて対話し、議論を深め、直面する問題についてのより洗練された道德的理解を共有することができ。こうした役割を果たす道德的な言語、またそれによって表

現される概念は、諸個人の内部で完結するものではなく、いわば身体の外にあつて、アクセス可能な共有財産であり、私たちが検討を行う足場となるものである。クラークは、これを「外的足場」と呼び、その重要性を強調する。この外的足場を利用することで、私たちは共同して問題解決を行うことができる。

以上のポイントを詳述していくことで、彼は、チャーチランドの道徳観について、「本質的に個人主義的で非構成主義的な自然化プログラム」(Clark 2000: 282)であると指摘する。そして、彼によれば、これこそが問題の根源である。クラークの考えでは、言語を介した対話を通して、道徳的な理解を深め、社会空間を共同して探究していくことにこそ、道徳的な進歩も存する。しかし、チャーチランドは、この部分の重要性を適切に認識できておらず、個人の脳における知識の習得過程に議論を限定してしまう。このように限定したままでは、言語の重要性、そして言語的に表現される道徳的規則が私たちの道徳的理解を安定させ、発展させる契機となっている点が見過(され)てしまう。

三・二 制度とスキル

ポール・チャーチランドは、クラークの批判論文に対して、基本的なクラークの主張を受け入れることを明確に示している (Churchland P.M. 2000: 291)。チャーチランドが認めるのは、外的

足場となる身体外の公共空間を利用することで、私たちの実践をより効率化し、発展させるという点だ。

チャーチランドは、外的足場において発展した道徳的規則の重要性について問題視していると言うよりは、その規則が受容され道徳実践に結びつける際の、根本的な知覚スキルの重要性を強調している (Churchland P.M. 2000: 298)。彼は、道徳的知識を何らかの規則と同一視してしまう態度を決して受け入れない。その一方で、外的足場が私たちの道徳実践に多大な影響を与えること自体には、彼はむしろクラーク以上にその意義を強調している⁽¹⁾。しかし同時に、社会レベルでの著しい進歩は認めつつも、個人に焦点を当てた場合、個人の道徳的徳が向上してきたとは言えないとも主張している。彼は、平均的な現代の北米の人と古代のレバント地方の人で、道徳的性格に進歩が見られるとは言えないという見解を示している (Churchland P.M. 2000: 302)⁽²⁾。一個人の一生の間に習得されるスキルは、脳の構造に大きな変化が生じない限りは、大きな変化は見られないだろう。しかしながら、それでも社会制度は飛躍的に発展している。一個人の生涯をはるかに越えて発展していく外的足場の存在が、ヒトに固有な発展を生じさせたこと自体は、チャーチランドも受け入れている。

ここには、クラークの主張の基本線を受け入れつつも、譲れないチャーチランドの主張を見て取ることができる。確かに規則が洗練され、制度が著しく発展することで、一見すると私たちの道

徳的知覚が大きく発展しているように思える。しかし、チャーチランドの見解に従えば、根本的な道徳的性格や道徳的知覚のスキル自体は変わらない。また、こうしたスキルこそが道徳実践の根本的な特徴であることも変わらない。そして、このスキルを構成するシナプス結合の膨大な構成は、他の社会的動物とも共有されている。彼は以下のように述べている。

それら「ヒト以外の社会的動物」の社会的認知は、ここまで論じてきたような、より原始的で非推論的な形式の内部のみ遂行される。そして、きわめて明らかなことだが、ヒトの社会における社会的認知の大半も同様である。典型的には、私たちの円滑な社会的交流に問題が生じたときのみ、規則や道徳的議論、法律、司法手続きといった推論的な足場が利用される。(Churchland P.M. 2000: 298 「」内は引用者)

このように、チャーチランドは、外的足場としての法制度などが著しい発展を遂げていることも、その重要性も認める。他方で、現実の状況での道徳的認知はあくまで、他の動物と類似した神経基盤のもとに実現される、という主張は変わらない。すなわち、彼によれば、スキルを発揮する際の入力となる環境が変化し、その環境の変化のうちに道徳的な進歩を見いだすことができるが、

道徳的な認知能力自体が変化しているわけではない。

三・三 道徳はヒトに固有のものか

以上の議論より、クラークとチャーチランドの相違点もある程度明確になる。クラークは言語を媒介にすることは道徳にとつて本質的であると考えているが、チャーチランドは言語を持たない動物の社会的認知のレベルに道徳という概念を適用可能だと考えている。そして、他の社会的動物との連続性という問題は、言語の位置づけの相違に依存することになる。

クラークによれば、認知科学の哲学者は、ヒトがいかに特別であるかを過小評価している(Clark 2000b: 311)^③。彼の議論が示唆するのは、道徳とは、言語を媒介にし、会話をを行い、より抽象的な概念を使用することができるヒトに固有のものである、という見解だ。チャーチランドは、道徳的諸現象において言語が本質的な役割は果たさない、という見解を取っており、それゆえに他の社会的動物とヒトとの間に明確な境界線を引かない。

四 規則をどのように位置づけるか

すでに見てきたように、クラークのチャーチランドへの批判は、言語および規則の重要性への認識が不十分であるという点を中

心に展開された。この規則の重要性については、倫理学者のアラステア・マッキンタイアからも、徳倫理的な視点から批判が提起されている。以下では、マッキンタイアの批判点およびチャーチランドの応答を概観し、チャーチランドの議論の問題点を明確化する。

マッキンタイアは、チャーチランドが規則の重要性を適切に認識していない点を指摘する。マッキンタイアの指摘するところによれば、徳の実践は、規則への一致だけで説明できるものではないが、規則への一致を必ずその部分として含む。徳の内実のうちには、他者と自分たちに平等に適用される規則を尊重することによってしか示すことができないような、他者への尊重が要求される。道徳的な規則を尊重し合い、その規則のもとで結ばれた関係性の中でのみ、徳を教えることは可能であり、道徳的な規則が軽視されるような関係性の中では、徳を教える場所を見つけることはできない。それゆえに、言明可能な規則を、道徳的性格の十分な反映としてしか捉えないチャーチランドの理解では、道徳的徳や道徳的性格の本性を説明することができない⁴⁾。

以上を踏まえて、マッキンタイアが指摘するのは、適切なプロトタイプとそうでないものの区別自体は、脳神経科学から導出されるものではない、ということだ。脳神経科学が知覚や学習のメカニズムを説明し、徳や性格に対応する脳の機能を説明するためには、それに先行して適切な道徳的区別がなされなければならない

い。たとえば、不合理で破壊的な怒りの状態を脳神経科学が扁桃体などの状態から説明できるとする。これが道徳の議論の対象となるには、その脳神経科学的な説明に先行して、何が不合理な怒りで、何が正当な怒りなのかという道徳的な区別がなされなければならない。そして、その区別は日常の観察や社会心理学などから学ばれるのであり、決して脳神経科学の知見から学ばれるものではない (Machyne A. 1998: 867ff)。

チャーチランドからの応答は、クラークへの応答と共通している。規則への一致について、チャーチランドとマッキンタイアの根本的な立場の相違は、道徳の位置づけにある。チャーチランドは人間以外の動物の社会性と人間の道徳性を連続したものと考えるので、彼の反論としては、他の社会性動物が規則への尊重なしに社会秩序を維持していることを根拠とする。しかしながら、規則が人間の社会制度を安定させ、他の動物社会では到底実現しない安定性を獲得していることは認める (Churchland P.M. 1998b: 894f)。

要するに、チャーチランドの構想においては、規則、言語、そして制度の問題はすべて同次元のもの、すなわちクラークの言う「外的足場」のレベルの問題である。そして、道徳的な知覚や判断、徳といったものは、外的足場の影響を受けつつも基本的には他の社会性動物と共有するスキルと同一視される。

チャーチランドにとっては、マッキンタイアやクラークが語る

道徳のレベルは、道徳的知覚や判断、あるいは道徳的徳の獲得といった道徳的現象のレベルの後に生じるものだと考えているように見える。もしもチャーチランドとマツキンタイア、クラークの間の相違が、上記のようなレベルの違いのみによるものであるならば、両者を整合的に位置づける統合した理論の構築も可能であるはずだ。次節では、チャーチランドの構想の概要および利点を確認した上で、特にマツキンタイアからの批判をチャーチランドがどのように受け入れることができるかを検討する。

五 包括的な脳神経倫理学の理論へ

ポール・チャーチランドの道徳の研究構想はかなりはっきりしている。以下では、その特徴、優れた点、批判に応答可能な解釈の可能性を検討する。

五・一 チャーチランドにおける道徳理解

第一の、最も重要な特徴は、脳神経科学やニューラルネットワーク研究という、認知一般が生じるメカニズムそのものを解明する一連の研究の中に、道徳的認知を中核とする道徳実践を位置づける、ということだ。これは出発点であり、このレベルでの説明の可能性を追求することこそが、彼にとっての自然主義的な道徳

研究である。

第二に、社会空間の中をナビゲートするスキルの集合のうちに道徳を位置づけており、道徳と社会性の間に明確な境界線は引かない。なぜなら、道徳的な認知や判断をくだす具体的な状況で生じる脳内の過程は、彼の依拠するモデルに即せば、他の社会的動物との明確な連続性のもとに理解されるような、シナプス結合によって構成されるスキルの集合に他ならないからだ。それゆえ、他の社会的動物の社会的認知とヒトの道徳的認知は連続的なものである。このことは研究構想として、他の社会的動物の脳神経科学的知見を、ヒトの道徳的認知の研究において間接的な証拠を示す知見として利用可能と考える態度を取ることを意味している。

第三に、関連する点ではあるが、道徳性を規則との一致とみなす見解には否定的だが、規則というものの自体を無意味なものともなしているわけではない。規則は外的足場として参照されるが、現実の道徳的知覚や判断が生じる状況で、知覚や判断、行為を完全に束縛するものではない。

第四に、道徳的進歩については、科学的進歩と同様の進歩が生じてきたのであり、今後も生じると考えている。その具体的な内容としては、複雑化する社会制度や、それを規制する複雑に発展した法制度や統治システムが念頭に置かれている。

五・二 チャーチランドの構想の利点

まずもって、彼のアプローチの優れた点は、認知の包括的な理解へと導く強力な説明力をもつ理論を構築することができる点である。道徳的現象について他の動物との連続性を仮定することは、他の社会的動物についての知見からの示唆を真剣に受け止め、また道徳の起源という進化的な問題にもアプローチが可能となる点で、広範な道徳研究の構想を提供する。

また、その基本的な道具立てが、認知のメカニズムをミクロレベルで説明する可能性を持つ脳神経科学を基盤にしたものであることも、評価されるべき点である。それは、道徳について包括的な解明のプログラムを提供する、というだけではない。自然科学は、物理学を最も根本的な基盤とし、諸科学は還元と統合をはかり、より洗練された理論を提供することで、自然世界の理解を深化させてきた。同様に、脳神経科学基盤の道徳探究は、心理学基盤のマクロレベルの知見に対して、還元と統合から、より洗練された理論を提供する可能性へと開かれる。

加えて、チャーチランドの構想は、言語の使用を道徳の条件と考えるクラークのような立場と比較した時に、道徳的能力の程度差をより広範に認められる。クラークの見解を敷衍すると、言語能力を持たない個人の道徳性が評価できなくなる、という懸念がある。この懸念により生じるかもしれない問題は、重度の障害な

どで言語能力を著しく欠いた個人の道徳的評価にある。言語能力を持たなくても、他者の苦しみや悲しみに気づき、ケアしようとする、あるいはそれ以上に「道徳的」と評価されるような行を行うことは可能かもしれない。言語能力の有無のみで、これらをヒトに固有の営みとしての道徳から排除して評価することが適切かは疑問である。また、ヒトに固有の営みから締め出された個人の道徳的人格をどのように評価することができるのかも疑問が残る。チャーチランドの構想は、このような能力の個人差を認めつつ、その差に応じて道徳的能力の程度差を認められる。この連続性に対する容認は、人権概念を拡張させる現代の傾向性とも合致していると考えられる。

五・三 規則は道徳に不可欠なものか

チャーチランドの議論の中で問題視される点が、規則の取り扱いである。すでに見てきたように、チャーチランドは規則が安定した制度をもたらすこと、また言語を用いて構築される高度に洗練された社会制度を道徳的進歩として積極的に評価している。しかしながら、規則についてマッキンタイアから提起された批判に対して、チャーチランドが適切に回答しきれているとは言い難い。チャーチランドは、道徳を社会的スキルの延長上に据えるため、道徳的規則を道徳の本質とすることができない。そこで、本稿の

最後の議論として、チャーチランドは規則をどのように捉えるべきかを検討する。

確かに、他の社会的動物と共有するような他者への配慮や信頼、社会的生活を営む基礎としての社会的振る舞いが道徳を支える根源的な要素であることは確かである⁶⁾。チャーチランドが強調する、脳によって実現されるこれらの諸要素が、道徳が成立する基盤の一部であることは間違いない。

しかし、人間に固有の道徳を考えたときに、規則が教育や道徳的思考において欠くことのできない重要な役割を果たしているというマッキンタイアの指摘は、ほとんど私たちの道徳的生活の事実を指摘しているものであり、それを否定することは困難である。私たちは道徳を教え、学ぶ際に規則に言及し、自分たちの道徳的判断や行為の適切性を反省する際にも規則を参照する。また、たとえ共感したり、無意識下で道徳的知覚が機能しないような状況でも、規則を思い起こしたり反省的に熟慮することによって、私たちは道徳的な判断を洗練させることができる。

チャーチランドは道徳的諸現象を「スキル」として捉え直すことを提案しているが、この規則を用いた道徳的思考もまた、ヒトに固有なものではあるが、しかし欠くことのできない重要な「スキル」と言えるのではないだろうか。そして、このスキルは、チャーチランドが強調するような他の社会的動物と共有するスキルと相補的な役割を果たすとも考えることもできる。道徳的な共感

能力や基本的な他者への関心、配慮の能力が欠けている人は、標準的な道徳的知覚などのスキルは欠けていると言えるかもしれない。しかし、そうした人々も、定式化された道徳規則を学び、それを実践の場で適用できるように訓練することで、道徳実践に参与することができるかもしれない。この可能性を認めることは、私たちの道徳実践を包括的に説明する上では重要な意義を持つと考えられる。そして、チャーチランドの基本的な構想と対立するものでもない。

よって、チャーチランドの議論に必要なのは、言語や規則の認知、そしてその認知が判断にもたらすメカニズムの解明へと進むことではないだろうか。ヒトが他の社会的動物と共有していることが多いことは、非常に有益な知見であり、道徳の起源や成立基盤を検討する上で重要な役割を果たすことは間違いない。これにより、言語・規則中心の道徳観が取りこぼす道徳の側面に光が当てられることは、従来の道徳研究にも有益であると思われる。しかし、脳神経科学の知見は、異種間の共通性だけでなく、種に固有な特徴・特殊性も明らかにすると考えられる⁶⁾。チャーチランドの議論が道徳的諸現象の包括的な説明を求めるなら、人間に固有な特徴として、規則や言語の重要性を指摘しつつ、伝統的な道徳理論を包摂するような構想を提供する可能性にも開かれるべきである。それゆえ、チャーチランド自身も認めるような規則や言語がもたらす安定性や制度の発展を可能にするものは何か、そ

の脳のメカニズムを解明する方向性と親和的な概念体系を模索することには価値がある。この価値が認められるならば、チャーチランドとクラーク、マッキンタイアの間の論争は、新たな知的伝統の開始点として、新たな研究構想を打ち立てる基礎を与えるものと解釈すべきであると考えられる。

六 結語

本稿では、道徳と社会性を連続したものとして捉え、膨大なシナプス結合によって実現されるスキルを基本概念として道徳的諸現象を説明するチャーチランドの構想を概観してきた。そして、規則を理解し適用する人間に固有の特徴を探究することで、より包括的な脳神経倫理学研究が進められるべきであると結論づけた。他の社会的動物と共有する基盤と、人間独自の規則や言語の使用に基づく道徳理解がどのように結びつけられるのか。チャーチランドの構想に基づきつつ、規則の問題を取り込むためのより広範な知見を包摂する概念体系の構築が、脳神経倫理学の可能性を発展させる上で重要な課題になると考えられる⁽⁷⁾。

註

(1) チャーチランドは、外的足場が人間の歴史から切り離せないこと

は前提した上で、外的足場が歴史とともに多大に発展したことを、古代の法や規範と現代の法・社会制度を比較し、例証する。

これは、彼の道徳的進歩に対する肯定的な態度を裏付けけるものとして説明される。彼が指摘するように、新たな認知的足場によって、新たな社会的実践が可能になり、古代の法制度では全く対応しきれないほど詳細で洗練された規則体系が成立している (Churchland P.M. 2000: 302)。

(2) なお、ここでも彼は科学とのアナロジーに言及しており、科学的理解についても、平均的な現代の北米の人とモーゼの時代の人々の全体的な科学的理解には、わずかな差しか見いだせない、と主張している (Churchland P.M. 2000: 303)。

(3) なお、特筆すべき例外として、ダニエル・デネットの名を挙げている。

(4) 欲求についても、同様の指摘が行われる。マッキンタイアによれば、特定の道徳的な徳を所有することは、適切に秩序づけられた欲求を持つことを含んでいる。ここでも規則の場合と同様に、適切な欲求だけで道徳的な性格を説明することはできないが、しかし必要なものであることには変わりない (MacIntyre A. 1998: 868)。

(5) 現在の脳神経科学の知見を参照しながら道徳性の基盤を探索す

る試みとして、パトリシア・チャーチランドの研究が挙げられる (Churchland P.S. 2011)。なお、パトリシア・チャーチランドの研究はポール・チャーチランドの研究と多くの点で立場を共有しており、道德概念の定義や規則の位置づけの問題が批判されている点も共通している。批判の例として、道德概念を明確にしないことを問題視しているマシェリ (Machery 2012) の議論や、無意識下の脳内の計算過程に注目し、規則が道德的認知と密接に関係していることを指摘しつつ、彼女の生得説批判の問題を指摘するミハイル (Mikhail 2013) の書評が挙げられる。

- (6) チャーチランドの基本的な方針を認めつつ、人間に固有な道德的特徴の基盤を説明しようとする研究の一つとして、コロンボ (Colombo 2013) の研究を挙げることができる。コロンボは、クラークの主張に対して、人間に固有の道德的認知の存在は認めつつ、その基盤は言語ではなく「華美な制御 (florid control)」にある、という反論を行っている (Colombo 2013)。彼は、人間の前頭前皮質とドーパミン作動系の相互作用に着目し、人間が、生命の維持や繁殖には寄与しない生物学的に恣意的な信念をもち、行動することを可能にする制御を「華美な制御」と呼んでいる。ただし、コロンボも言語が道德的認知や社会的意思決定に因果的な影響を与えることは認めている。

- (7) 本論文の執筆に際して、米村恵一、大枝真一、千葉建の各氏に有益な助言をいただいたことに感謝する。

参考文献

- Churchland, P.S. 2011. *Braintrust: what neuroscience tells us about morality*. Princeton University Press.
- Churchland, P.M. 1998a. Toward a Cognitive Neurobiology of the Moral Virtues. *Topoi* 17: 1-14.
- Churchland, P.M. 1998b. Replies. *Philosophy and Phenomenological Research* 58 (4): 893-904.
- Churchland, P.M. 2000. Rules Know-How and the Future of Moral Cognition. in Campbell, B., Hunter, B. (eds) *Moral Epistemology Naturalized*: 291-306. University of Calgary Press.
- Clark, A. 2000a. Word and Action: Reconciling Rules and Know-How in Moral Cognition. in Campbell, B., Hunter, B. (eds) *Moral Epistemology Naturalized*: 291-306. University of Calgary Press.
- Clark, A. 2000b. Making Moral Space: A Reply to Churchland. in Campbell, B., Hunter, B. (eds) *Moral Epistemology Naturalized*: 291-306. University of Calgary Press.
- Colombo, M. 2013. Leges Sine Moribus Vanæ. Does Language Make Moral Thinking Possible? *Biology and Philosophy* 28: 501-521.
- Machery, E. 2012. Delineating the Moral Domain. *The Baltic International Yearbook of Cognition, Logic and Communication* 7.

<http://dx.doi.org/10.4148/byc.v7i0.1777>.

MacIntyre, A. 1998. What Can Moral Philosophers Learn from the Study of the Brain? *Philosophy and Phenomenological Research* 58 (4): 865-869.

Mikhail, J. 2013. Review of Patricia S. Churchland, Brintrust: What Neuroscience Tells us about Morality. *Ethics* 123 (2): 354-356.

※本研究は JSPS 科研費 JP17K18471 の助成を受けたものです。

(い)たじ・ふしひの 木更津工業高等専門学校)